E子のコミニュケーション能力の向上をめざして

―文字によるコミニュケーション行動からのアプローチ―

田 口 久 恵

コミニュケーション能力、中でも音声言語に著しい遅れを持つE子に、過去二年間の考え方、指導経過（注1）をふまえた実践の中で、特に文字によるコミニュケーション行動からのアプローチを試みた実践について述べてみたい。

1．E子の実態と58年度，59年度の取り組み

（1）．生育暦

・9才11月　・正常分娩　・歩行開始3才　・叫声，なん語音はあるが発語なし　・通園施設に3年年通園　・就学猶予1年で本校に58年4月入学　・神経過敏，多動，声かけにも視線が合わず、自閉的精神障害児と診断（54年，中央病院　・CT異常なし　・脳波に僅かな異常，夜間発作が稀にあり、てんかんと診断（59年同病院）　・6才頃から絵本や文字カードに執着し、常時持ち歩き並べる　・その頃から特定の単語の弁別が出来ていた　・入学時は着席行動がとれず

（2）．58年度の取り組みと結果

友達とのリズムのある楽しい学校生活を通して、心身の全体的発達，生活意欲の向上をめざし、その中で少しずつ着席，注視，聞き取り等の模倣前段階の能力を育てていった。その結果、落ち着いて担任の指示が聞けたり、注視しりたする能力が芽生えた。また、歌の当て振りから、身体模倣が少しずつできだした。

（3）．59年度の取り組みと結果

58年度の取り組みを踏襲しながら、模倣期への移行を重視し、週2回個別学習を取り入れ、身振り言語の獲得に重点をおいた。（注2）　その結果、「引っぱる，指さす，ちょうだい」を基本にした身振り要求が出始め、直接的なコミニュケーションだが、人にかかわる姿勢が生じ、コミニュケーションの素地が育ちかけた。

また二学期頃から、文字単語，五十音の弁別等の文字学習への意欲が高まり、その能力も急速に高まってきた。

2．本年度の取り組み

積極的に人とかかわっていくというコミニュケーションの素地を、全生活を通し集団の場で更に育てる指導を中心に置きながら、一方、E子の文字に対する強い関心と上記の文字学習への実態から、この機をとらえ、言葉を文字で表すコミニュケーション行動の学習に取り組んだ。文字による表現が可能になれば、五十音表の指さし，音声付き電子文字盤，筆談等によってコミニュケーションを深めることができる。また、文字の学習が音声を引き出すきっかけになることも期待した。（注3，注4，注5）　以下、　文字指導の実践について述べたい。

3．実践事例　「二文字単語の指導」

単語は弁別できるが文字で綴れないE子の指導は、まず、単語を音節に分解して、固まりとして把握しているものを砕き、構成の学習をする必要がある。書写技能が伴わないE子の実態をふまえ、次の目標を設定した。

（1）．目標

①．言葉は文字の組み合わせであることが分かり、分解，構成する。

②．文字は異なった形や音声を持ち、組み合わせで言葉ができることが分かる。

③．五十音の形，表の位置が大体分かり、押さる，スタンする等で言葉を作る。

④．文字を使った伝達に関心を持つ。

（2）．指導の方法

①．週2回（1回30分）の個別学習で指導をする。

②．文字単語パズル（市販），文字パズル（自作），ひらがなスタンプ（市販）を使用。毎回、この三つの教材に取り組む学習のパターンを設定する。

③．基本的には「音声法」（注6，注7）に依りながら、E子の実態を補い，生す方法を工夫しながら指導する。

（3）．指導の実際

第1期（60．4．～5．中旬）ー実態把握と五十音の弁別ー

①．指導の概要

学習内容・意図	様子・結果
・単語の弁別能力確認のため、（数枚の単語カードを提示）→（「あひるはどれですか」）→（あひるを選び、絵とマッチングする。） ・文字の弁別能力確認のため→（数個の文字積木を提示）→「あを下さい」→（あを選んで差し出す。） ・五十音表把握力確認のため→（箱に並べた積木を提示）→（「あは、どれですか」）→（あを指さしたり取り出したりする。）	・選択項を5～10へ増やす。10枚の選択項から4文字単語の弁別可能。 ・指示を文字カードで示す。「てをあらう」「くつをはく」等、すべて分かる。 ・選択項を2～15へ増やす。15個の選択項からすべての文字の弁別が可能。 ・形の認知が不十分なのか、あとお、へとく、めとね　等の混同が有る。 ・範囲を限定すれば取れだしたが、一人では中々取れない。 ・あ・い・う・え・・と、押さえさせる。一文字ずつしっかり押さえられない。

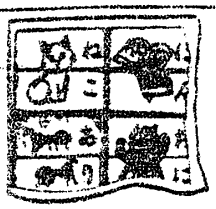
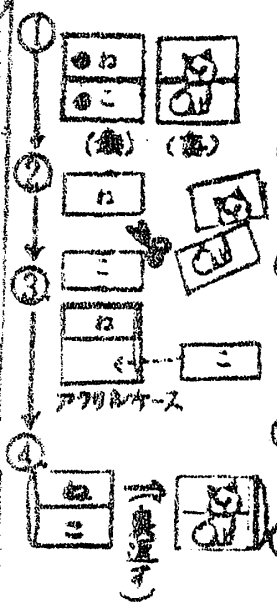
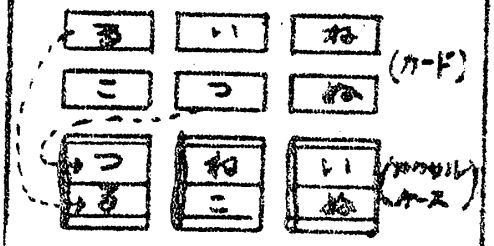
②．第1期の考察と第2期への展望

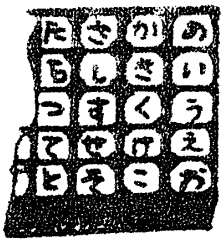
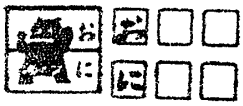
文字への興味がどんどん強くなっていくこと，60年1月の実態に比べ急速

に進歩していること，指導者を真似て、積木をうまと並べ馬の絵とマッチングする遊に興味を示す等、二文字単語づくりの学習のレディネスが見られる。前出の三つの教を使って、本格的に学習に取り組むことができる。

第2期（60．5．下旬～60．7．）―ひらがなによる単語の音節分解と構成―

①指導の概要

	学習内容・意図	様子・結果
①もじ単語パズル（二文字単語の分解・構成）	 ・左図の様な二文字単語２０（４０片）で出きたパズル ・台紙にも無彩色で同様な印刷がしてある。 ・二文字の単語の中で、発音しやすく分解し易い単語が吟味，選定してある。 ・分解する ・「ね・こ」「あ・り」と指示されて ・構成する ・台紙の絵や文字にマッチングして ・「ね・こ」「あ・り」と指示されて ・表記順を意識しながら，自分で	・パズルを持ち歩き、一日１０回以上ばらし、左上から順に構成。 ・盤を裏返して、一度に分解していたが、初めて、全部指示通りに分解。 5/30 ・絵に着目．こ ね と、はめても猫の絵を作ることに終始。文字を繰り返し指示した結果、指示した文字どおりに初めて全部はめられた。 9/2 ・ねことはめた後、文字を●●と押さえ、自分で作った言葉，文字への関心を示し始めた。 9/2
②文字単語カード（二文字単語の分解・構成）	・文字のみに着目して単語を分解・構成させる為に、上記の教材を応用して、次のような教材を自作し、指導をした。  ①文字を指さす。●を置く。裏返して絵と結びつける。 ②カードを切る。単語は文字へ、絵は形を失う事を見る。 ③分解した文字をね・こと言いながらアクリルケースに差し込み、単語を構成。 ④裏返し、ねこの絵を確認。即時自己評価をする。 ⑤ね・こと言いながら分解． ・①～⑤の活動をセットで繰り返す。 ・１回の学習で、新カード１～２枚切断し、選択項をだんだん増やしていく。	・上記の教材の絵や文字を拡大して使った為、親しみがあり、喜んで取り組む。 ・声は出ないが、●●と音節に合わせて指差しができだした。 5/30 ・切断した６枚（３組）の選択項から、「ねこ」「つる」「いぬ」とも指示した文字を取って作れた。  ・新出カードは、必ず５回練習してから選択項に加えることにより、新出カードちよる混乱が少なくなって来た。 6/30 ・８枚の選択項から５分間に６組の単語を構成。スピードがアップする。 9/5 ・裏の絵で確かめながら構成しだした。

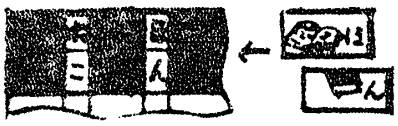
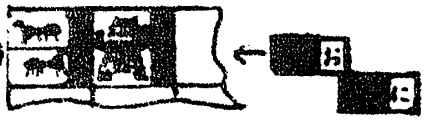
3ひらがなスタンプ（五十音を覚え・単語の構成）	 ・ひらがなや五十音表が分かれば、文字が書けなくても、将来、タイプやワープロでも伝達可能では・・と考え、左の様な教具で、次の様な指導をした。 ・1．5×1．5×6cm のゴム印が五十音順に並べてある。 ア．「あいうえお」の歌で、文字をおさえる。 イ．好きな文字を押さえる。→（Ⓣが音声化） ウ．指示された文字を押さえる。 エ．好きな文字をスタンプする→（Ⓣが音声化） オ．絵の横に、見本に合わせスタンプする。  ・位置を指示されて ・自分一人で ・ア～オの活動の中から1～2選んで取り組む。	・箱を開けるのも待てないぐらい喜ぶ。 ・指先に力がなくスタンプする時援助が必要 ・あいう・・の指示に行は意識するが、あい・・と、しっかり押さえられなかった。（S/III）が、手を持って押さえる内に少しずつ、しっかり区切って押さえだした。（7/19） ・指示する，自由に，と，援助を加減しながらア～オを色々取り混ぜてとりくんだ。 ・同じ単語を3回繰り返すと文字の位置が分かったが，次の単語を繰り返すと前の文字の位置を忘れてしまう。（7/19） ・あいとスタンプしたので、大好きなあいにしたら大喜びした。 ・一人で取れる文字があいとうるわ さたの8文字になった。（7/19）

② 第2期の考察と第3期への展望

新しい教材を使ったので興味は持てたが、扱い方や学習方法に慣れたり、意図に沿った活用が出来るまでに時間がかかり、一時スランプ状態も見られた。その度に援助を多くしたり、遊びの要素を増やしたりした。7月に入り、今まで蓄えていた力を一気に出すように、どの学習も急激に進歩が見られ、単なる単語づくりの段階から、これを生かした伝達遊びが出来る段階に来ていると感じた。

第3期（60．9．～12．）―単語を構成し伝達遊びに生かす―

① 指導の概要

	学習内容・意図	様子・結果
もじ単語パズル（単語の構成）	・見本合わせの要素をすこしずつとりさり単語づくりを更に意識させる意図で、次のような改良を試みた。 ①  ・台紙の絵を切り取る。 ②  ・パズル片の絵と台紙の字を切り取る。	・台紙を準備して慣れるまで約1月、取り組まない。11月に援助で完成してから、抵抗なくできだした。 ・下の字を先に見つけても横に置き、上の字をはめてから下の字をはめだす。 ・12月から②の方法に入る。おこと、一字ずつの指示が、まだ必要。 ・文字を指差し、●●と音節に切って声を出すことが、よく見られだした。
	・構成した単語を伝達に生かす意図で、次の遊びを工夫した。	・身振りが気に入り、喜んで取り組んだ。

文字単語カード（単語を構成し、伝達に使う）

① ・Tの「これはなんですか」の質問に、絵カードを見る。

② ・数枚の選択項から答えの二文字を選び、クリアケースに。

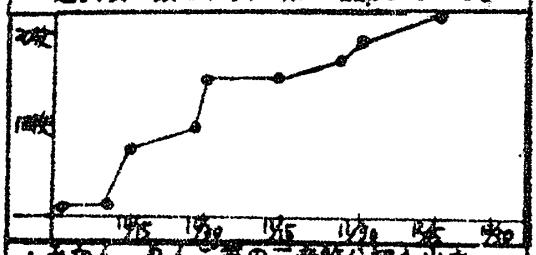
③ 1の質問に、次の方法で応答する。

それは（①のカードを指さす）
（②の構成した文字を指さす）
です（両手を肩の位置でにぎる）

④ ・ケースを裏返し、裏の絵と①の絵を比べ評価する。

・身近な具体物の絵カードに広げる。
・「私は～がほしい」「私は～がたべたい」等の伝達に広げていく
・選択項の文字カードを増やし、五十音表の様に並べる。

・㋐がどんなカードを出してくるかと、わくわくし、声を立てて笑う。
・選択項が10～12に増えると、㋐と㋑、㋒と㋓、㋔と㋕の混同があった。が、裏の絵をちらっと見て、慎てて取りなおししだした。
・「上から」と言う指示をしなくても、大体、上の文字からはめる様になってきた。
・「～です」と文字を指差すだけでなく文字をなぞり始め、書き言葉への芽生えが見えた。以降、なぞることは続いている。
・文字をなぞる時、マイク代わりに握りこぶしを出すと、エ・エ・と声が出はじめた。
・選択項の数は、次の様に増加している。



・みかん、りんご等の三音節分解も出来だした。
・ほしい、食べたいの身振りは、自分でつけた。

ひらがなスタンプ（単語を構成・伝達に使う）

文字単語カード同様、伝達に生かす遊びを工ぇ

① 指導者の「これは何ですか」の質問に絵カードを見る。

② ・正解を紙で隠したますの中に、答えをスタンプする。

③ 1の質問に、次の方法で応答する。

それは（①の絵カードを指さす）
お に（②のスタンプした文字を
です（両手を肩の位置で握る）

④ ・隠していた紙をはぐり正解の文字と比べ、評価する。

・正解を紙で隠すことが意欲につながる。
・「お・に」とイメージしても㋐と㋝の位置が分からない。5～6文字の範囲で位置を示すと、さっと取れた。
・文字を探す時、指でぐるぐるする。始めでたらめの範囲だったのが、だんだん似た範囲を示しはじめた。
・すぐ範囲を示したり、直したりしないで、援助の手を抜いていった。
・じっくり待つとじっくり探し始め、次の○印のもじは、一人で取れた。
あり ○ね ○し ○に ○め ○つ
○る ○き ○こ ○ほ○○え○

（4）．考察と今後の課題

単なる単語の構成から、それを使った伝達遊びを導入したことは、E子の興味レディネスに合い、身振りと文字の統合による伝達と言うところまでこぎつけた。特に、3期後半はスピードと正確さが急に増し、「よどみ　進歩」の繰り返しを痛感した。また、文字を指差す時、握りこぶしのマイクで、声が音節を切って出だしたこと、文字を見るとすぐなぞり始めたこと等は、音声言語や書き言葉への小さな見通し、希望を持たせる収穫であった。

4月～12月迄を3期に分け、節のある取り組みをした。それぞれの期の学習に意欲的に取り組み、ある程度目指していたことができだしたとはいえ、ややハイペースで進み過ぎた感も持つ。今後、三音節の単語の分解・構成，伝達内容の拡大等を考えているが、E子の様子を見ながら、焦らず、じっくりと足固めをしながら進みたい。

文字に依るコミニュケーション行動の生活場面での活用は、残念ながら一度も見られなかった。しかし、E子の文字の習得や伝達遊びへの意欲等から考えて、この方法も将来大切なコミニュケーション手段の一つとして生きるのではないかと期待し、気長くこの取り組みを続けたい。

4．おわりに

以上、二文字単語づくりの学習を中心に実践を述べた。しかし、E子にとってこれは、ほんの一部の取り組みにすぎず、全生活，集団の場を通した対人関係の改善や、表現・伝達意欲の高揚がコミニュケーション能力の向上の中心となる柱であることは、言うまでもない。

表出言語のない子のコミニュケーション行動については、今、色々な角度から研究されている。これらの情報を常に収集し参考にしながらも、「言葉は教えるものではなく学習されるもので、全体的な発達の一部である」と、いう基本的な考えを常に胆に命じながら、E子との共感を更に高め、E子のコミニュケーション能力の向上に取りくんでいきたい。

参考文献

注1．研究紀要第6集　鳥大教育学部付属養護学校（P7～P13）
注2．ことばのない子のことばの指導　東　正　著
注3．重度・重複障害児教育の理論と実際　大石　三四郎編（P78～P94）
注4．自閉児の言語　玉井　収介著（P87～P95）
注5．自閉児の言語獲得　昌子武司・浅野昭久著（111～128）
注6．ちえおくれの子どもの国語　近藤原理・中谷彪人　編（P120～P203）
注7．かな文字の教え方　須田　清　著